（別紙２）　　論文審査の結果の要旨

氏名　　池田知正

本論文は、古代中央ユーラシア東部に成立した突厥の歴史をおもに漢文史料を用いて再検討している。一般に、史書を参照する場合には、古くまとめられた史書をより重視する。それは、古くまとめられた史書の方が、新しくまとめられたものよりも、より古い材料を提供するはずだという、もっとも蓋然性の高い予測に基づく判断があるからである。

ところが、厳密に言うならば、古くまとめられた史書の材料が、新しくまとめられた史書のものよりも、常に古いと断言できるわけではない。いまある記述からは不明なだけで、実のところ新しくまとめられた史書において初めて採用された記事がないと断言できるわけではないからである。その意味からすれば、仮に事実の検討を進めた結果として、上記の判断に疑義が生じる場合には、あらためて新しくまとめられた史書の材料と古くまとめられた史書の材料を想定復原しながら、比較検討する作業も必要になる。

本提出論文は、その作業を地道にすすめたものである。

可能性は可能性としていくつかを併記しつつ、その複数の可能性の並立状況から帰納される結論が可能性の高さを考慮したものとして提示される。例えば、突厥の君主、可汗の系譜の復原をはかって、この手法を用いた結果、ある二人の人物の関係が通説の兄弟と違っていとこどうしである可能性が高いとされる。これにより、従来の説において、その二人の人物のうち一方とその父との関係を正しく考証した結果と、その結果に齟齬する別の記録との間に資料解釋上の難点があった点が解決できる。こうした考証には、その方法の正しさと手堅さが認められる。

従来の確かでない推論を批判的に検討して得られた結論は、通説とは明らかに異なるものになった。通説では 583 年に突厥は東西に二分したとされている。この通説と分裂に関する諸説に対し、本論文は、内乱が収拾する 7 世紀初頭までの突厥情勢を，従来低く位置づけられていた人物をも権力者として位置づけながら、三者の分権化の過程としてまとめなおすことになった。

この結論は、上記のような手堅い考証を基礎にまとめられたものだとはいえ、また、すでに知られた碑文資料を参照したものであるとはいえ、論者によっては、今後新たに発見されるであろう突厥碑文やトルファン新出漢文文書などによるさらなる検討の必要性を強く求めることが予想される。また、論文提出者が進めた考証の手法は、類似の検討が関連する史書等においてもなされることで、より確かな結論としての地位を得るであろう。この点、今後のさらなる研究の展開が期待されるところである。

以上から、本審査委員会は、提出論文をもって、博士（文学）の学位を授与するに値するものとの判断をくだした。